

おおよまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
7月号

毎月23日発行
通巻407号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年7月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



かたつむり 井手 泉さん 撮影

昭和58年8月18日 (旧7月15日)

東光大祭・祖霊祭法話 (上)

旧拝殿にて

法主 矢追 日聖

東方に光の現象

暑い時でございますので楽にして下さい。というたかて狭いので足を伸ばすわけにもいきませんが、気持だけでも楽に、別にお寺さんみたいに説教するのところが、皆と一緒に遊ぶというのが目的でございます。

東光大祭は大倭では夏のお祭ということになります。この日を設定したのは終戦直後、もう昔のことでございます。

お月さんがちようど東の春日山から出てくる、そして太陽が西の生駒山に沈んでいくという、そういう時間帯で、まだ暗くもなっておりませんでした。そんな時に、東の方から七色の虹のような非常に美しい光が、サーチライトのように放射状に出たんです。色の濃いのが四本、その副えのようなちよつと薄いのが四本で、合わせて八本出ているわけです。それはもう実に見事なものでした。

なかなか現われるものじゃないんですけど、これは自然現象で、皆の目で見られる一つの現象なんです。今どきのようにカメラを提げてるんだったら記録にとっておいたんですけれどもね。

それが妙な自然現象だなという程度でとどまるんだったら何でもなかったんです。それが……。

昭和二十一年、旧暦の七月十五日でした。

その頃はもう世の中ドサクサで、私も百姓をしております、今の鏡池の下の

田んぼの畦で牛の草を刈っておったんです。

その時ね、背後から頭が、何か吸引されるみたいにパツと引っぱり上げられる感じがするんです。おかしい感じだなとは思ったけれど、早く片付けて家に帰りたいと——その時はまだ、ここに住まいしてません。庄山の実家におりました——気が急いでおるので、ナニクソとつむいてやってました。けど、そんなことを三、四回繰り返すんでね、もう力を抜いたら、ふつと頭を東に向けておられたんですね。

何とまあ不思議な、これを見よということやなと、ぼーっと見ておったんです。そうしたら、虚空からボーンと大きなホールで響くような感じで声が聞こえて来るんですよ。ということね、実は念の力、心だけが来るんですけども、人間には脳があつて、それがコンピュータみたいなものですから、脳に入つて言葉に変化させるんですね。そして私は日本人ですから日本の言葉で、「レイメイハ オトズレタリ……」と、そんなのが、一回で文章みたいにさーつ出てくるんやなしに、何回か同じことを繰り返して、繰り返して結局、自分の頭で考えて整理すると、「黎明は訪れたり 東方の光 大法は立てり 大倭太加天腹」という結論なんです。最後にまとまると、そういうような言葉になる、そんな響きなんです。

立教の心

それでまあ、この場所を根拠地として、私の宗教的な仕事を出発して活動せよということなんだなと思つたんです。

大体ね、日本の宗教とか宗教団体では、病気が治るとか、災難から護つてもらおうとか、大難を小難にしてもらおうとか、言うてみたら人間の勝手な

欲のために、神さんや仏さんの力を借りるといふ信仰が多かつたんです。自分が幸せになるように、神仏を祀つて拜むというような指導を宗教家がおつたんですね。

だから、私は宗教の仕事といえは、嫌だつたんです。そういう形の宗教に対しては極力、否定したんです。

例えばお葬式の時でも、うちは何々宗ということで、本当に信仰を持つているのかどうか分かりませんが、とにかく皆、どこかの宗教団体に入っています。これは日本の仏教なんです。インドでお釈迦さんが生きてはつた時には、死んだ人に対してお経を唱えるとか回向供養したら浮かばれるというようなことは、一言も説いておられないんです。お経自体、お釈迦さんが亡くなつて何百年もたつてから出来ているものだからね。

お釈迦さんの生まれたのはインドというよりネパールなんですけど、とにかく険しい、暑さ寒さの厳しい、食うものも乏しいような所です。人間が本当に苦労している姿を見て、釈迦というような聖者が出たんです。つまり、その生活環境の現実から出ているんですね。もしお釈迦さんが、日本のような四季の変化のある、農耕を中心としたこんな豊かな国に生まれたとしたら、平々凡々な人だつたと思います。

人物というのは、土地の環境とか時代、そういうものが出ますよ。あなた達とお釈迦さんでも、人間にはそう変わりはないんです。キリストでも、生まれついた時代、そしてその時代の社会的背景や色々なことがあつて有名になつていまして、その時代にそういう生き方をしたから立派な方だと言えるんですが、人間としての能力という面からいくと、今の時代でもそのぐらいの人はたくさんおると思います。

要は一つの自分の考え、信念の問題なんです。私に神さんが教えてくれることは、日本の既成宗教のような形に対して、もう全然ひっくり返っているんですね。

本当の宗教というのは、自分のためとか他人のためとか、そんなものではない、自分も他人も一つになつた気持で、皆が幸せになるようにという道なんです。それを自分も実践して皆をリードし指導教化していくのが本来の宗教家の姿なんです。

それは生きている人間の世界のことですから、着物を着るのと同じで、形のものはやっぱり必要ですし、最低のものはあつてもいいんですよ。けれどもね、大きなお堂や伽藍は必要ないと言われます。立派な殿堂を建てて、中に木仏金仏のような偶像を並べて、それに手を合わせてお賽銭や物を供える、その代わり、やれ商売で儲けさせて下さいとか、あなた達もよく考えてごらん、それでは信仰が欲との交換条件なんです(笑)。

人間は自分に都合のよいような勝手気ままなことを願つてますが、神さんの心は、そういうものじゃないんです。まず一番先に皆さんに教えておきたいことがそれです。

この拝殿は、大倭教が始まつて七年目に出来たんです。掘つ建て小屋でね、柱は埋めてあつたんですが腐つたので切つてコンクリートの礎石を入れたり、屋根は杉皮をスレートの瓦に変えたり、台風でゆがんだら直したりしていますが、もう三十三年経つてます。これが大倭教の金堂なんです。世間のお寺などに行きますと、ご本尊の入っている所やから、大金をかけて立派なお堂を拵えているのが当たり前なんです。

ところが私の神さんは、屋根があるだけマシやないか、まだこれでよいとおっしゃいます。世間

の宗教とは全然ちがうけれども、これは神さんの本心なんです。(※平成元年五月、新拝殿竣工)

一つの現象として日が沈む時にちょうど月が出て、そしてお月さんの方から光が出てくるんです。だから私の仕事は、日が当たらない、いわゆる社会の谷間にいて苦しんでいるような人達を対象にしていく、そういうような行き方をせよということなんです。

これを記念したお祭りが東光大祭です。

お盆の習慣

それがたまたま旧暦七月十五日、仏教のお盆の日です。関東方面では新暦でお盆をやりません。関西では新暦でも一カ月遅れの八月十三日から十五日にお盆の行事をやりません。商売の盛んな土地柄だから、勘定次第で自由にものを考える。百姓は八月大名と言っています。田んぼも一番手間がいらない。水さえ見に行つて草刈りしていただい。農閑期で都合がいいんやわね。あとの十六、十七日は盆の敷入りで嫁に行つた者は孫を連れて実家に帰つて来るしね。

色々あつて死んだ人は忙しい話ですワ(笑)。これも死んだ人を人間が思うように振り回すという考え方やわね。

盆になったら地獄の蓋が開くのか、先祖さんが帰ってくるのか、まあ知らんけれども、地獄の極楽やの、あなた達は疑うこともいらぬし信じることもしらないんですよ。疑うにしても信じるにしても、証拠のない話やからね。よう坊さんが、針の山やか釜で炊かれるとか鬼に金棒でどつかれるとか地獄の話をはるけど、これは精神的教育上の物語やなと思つてもらつたらいいんです。先祖さんが極楽に行つて蓮の台に座つてるんや

つたら何で回向供養をせんなんのやろ。何か食べたいとか欲しいと思えばパツと出てくるし、ちょっと音楽を聞きたいなと思えば聞こえてくる、極楽というのはそういう所らしい。それが汚い自分とこの仏壇に帰つてきて、やれお盆や、やれ何やと年がら年中、お供えしてお経唱えて回向供養するということは、これ先祖さんを地獄に放り込んでるんとかがうか(笑)。もし地獄極楽があるんやつたら、私は地獄の鬼になりたいと言ふね。金棒で餓鬼をどついとつたら、その方が面白いで(笑)。今度はまたお墓にもお参りに行く。その度に坊さんをお経をあげてもらつたら、お布施を包まんならん。先祖さんが、ええダシになつていてみたいやわな(笑)。

それは昔からの習慣上やつてきているだけのことです。本来の意味から離れてしまつています。

大倭の祖霊祭

今日は、大倭でも祖霊祭として、斎庭さいぢの土の上で、今、ちゃんとお供養してきました。私の言うお供養は、たゞ物を供えたりお経を唱えたりして、それで浮かばれない先祖さんを浮かばせるとか、そういうのとは違ふんです。

皆さんが塔婆に書いてある先祖さん一人一人を、念で呼び出す、ということとは「今日は大倭のお祭りやから遊びに来て下さい」と、こちらで招待しているわけなんです。何も仏さんやとか、そんなものじゃないんです。

皆さんは肉体を持つている人間、死後の世界におる先祖さんやとか皆さんの関係者は肉体を持たない人間で、同じ人間同士です。肉体を持つつか、持たないかだけの相違なんです。死んでいても生きていても同じことなんです。

「まつり」というのは、「まつろう」ということなんです。「まつろう」というのは、まとわりついていくことですね。何かの目的とか目標を一つの芯にして、それに大勢の人がまつろうて、色んなことやることをお祭りと言ふんです。

例えば呉服祭りやとか、神さんとは関係ないけど、大売出しを目的にやつてますわね。たくさん売れるし安く買えるので、売り手も買い手も両方が喜ぶ、これが祭りの意味なんです。

神輿みここしは日本のお祭りの代表的な形ですわね。神社の御霊みたまを神輿に遷して四方から担いで、御霊を中心にして前後左右に押ししているんです。四方八方から皆がまつろうておるわけですね。押ししている方向はマチマチやけれども、神輿はちゃんと上に乗っています。

結局、それが日本の姿なんです。日本の宗教の原型です。時間がきたら、最後は何かおさまるところへおさまる。例えば、こつちで右翼思想の人がいて押す、またこつちには左翼思想の人がいて押す、保守も革新も、よつてたかつてあつちへ押しこつちへ押し、真中で芯を担っている人はどつちつかずのようにフラフラしとる(笑)。しかし、フワフワしているうちに、あるべきところに落ち着く、これが日本の国です。

そのようにね、大倭のお祭りやから、先祖さん、いわゆる霊界人も我々現界人も一堂に集まつて、ここで楽しく遊ぼうやないか、共に喜ぼうやないかというのが今日の一つの目的なんです。

というのはね、現界人同士はお互いにものが言い合えるけれども、肉体がなくなつて霊界に入つてしまうと、何かの縁のつながりがなければ、霊界人同士で話したり、仲良うしたりも喧嘩したりもできないんです。ほんまに孤立しているんです。最近、人間社会にも似たような場所が出来てきて

ますよ。四角い建物に大勢の人が暮らしておつて隣り同士でもものを言わないとか、お互いのことを全然知らないとかね。それはやっぱり、あまりええことないなあと私は思ってますが。

私は齋庭で、皆さんの先祖さん一人一人に対して「お出でなさい」と呼ぶだけなんです。回向なんか全然していません。難儀なことに、霊界人はお呼びがなかつたら来られないんですね。だから今日のお祭りは霊界人が一番喜んでおります。

集まった霊界人同士が、ここでは話もできるし心やすうなれます。生きている時に、例えば癌で精神的な悩みを持つていたとか、足の悪いことで苦しんでいた人は、肉体はなくなっても霊界で心はその悩みや苦しみを持つたままなんです。それが、ここには色々な種類の霊界人が来ていますから、中には病気を治す能力者もいます。長年苦しんでおつたのが治るわけです。学問がなくて劣等感を持って死んだ人であっても、色々と教えてもらって、死んだ世界で安心感を持ってらんです。

大倭に縁故のある者だけですけれどね。皆さんが塔婆に書いておられるだけやなしに、私の知っている範囲の人は皆、呼んであげてるんです。そこへ生きている関係者も来てまつろうています。それがお祭りの雰囲気なんです。

それとまた、霊界というのは土と非常に関係があります。電気もそうやと思えますが。だから齋庭ではできるだけ姿勢を低い所に、まあ円座は敷いてますけれど、土の上にじかに座って、今言ったような霊的交流をするんです。

人間の時間では、これから夕方までの短い時間ですが、霊界というのは時間のない所なんです。それはもう千年も万年も楽しんでような気持ちになるんです。そうすれば、今まで苦しんでいたのが、喜びを持つように変わるんです。そこにこの

お祭りの意味というものがありません。

心霊治療は宗教ではない

大倭へ出てきて先祖さんが喜ばば、それでまた肉体的な条件で苦しんでいた子孫の人が治つたとかいうこともあると思います。

皆さん方もね、大倭でなくても、どこかで押んでもらつて病気が治つたという例をご存知やと思います。私自身もそういう経験がたくさん持ってます。けれども、これはね、押んだから治つた、神さんが出て来て助けたとか、そんなんじゃないんですよ。

治つた人もやがてまた死にますし、一時的な話であつて永遠に治つたわけじゃないんです。心霊治療と言つたらいいんかね。私個人がそういう能力を持つているわけです。人によつて治せる能力のある人、ない人があるんです。このお経を唱えたら治ると言うんやったら、誰でもそのお経を唱えたらいいわけです。しかしおそらく治らんですよ。治すような人であれば、お経みたいなもの唱えなくても治しますよ。

私から言わせれば、それは一つの心霊治療なんです。私も生命体を蝕んでいる病気をたくさん扱つてきました。肉体を持つている場合であれば肉体に病気が出ます。肉体がなくなつたらその靈魂が患つています。それを私の霊的な能力でもつて治療するわけです。生命体の中でだんだんと治つてくると、肉体の方も自然に良くなつてくるということもあり得ることなんです。

けれどもね、肉体の限界が過ぎていて、どんなことをしてもダメという場合は、なんぼ心霊治療しても死んでいきます。肉体には肉体としての限界がありますからね。

まあ、もし私が死んだら、大分、病気の霊界人に対して治療してやらなあかんあと思つてます。けれど今は生きて肉体をはめてますから、極力、私はそれをやりません。

宗教というものを表に出して、やれ病氣治しますとか、そこから大倭の神さんはありがたいというような方法で人を集めたとしたら、もう私の命はありません。直ぐに霊界人が迎えに来て、心臓がコトツと止まりますわ。世間の人のことは知りませんが私は、それだけの監督をされています。霊界の肉体を持たない仲間がたくさんおつて、その人達の監督の下に、私は現界において命のある間、仕事をしているんです。

私も、しばらくしますと七十二歳になりますからね、もう先は短いです。けど、あつちの方が里なんです。こつちへ仮に出てきているので、あと十年先か二十年先かそれは分かりませんが、本家へ帰らないといけません。それまで、ということには生きている間は、できるだけ霊界人に添うような生き方をしなければいけないと思つています。

(続く)

こぼれずみ 京都府電岡市 向井 弓子

5月23日、私の住む亀岡で、「をむすびコンサート」趙博大いに歌い語る「イラク写真展」を友人達と開催しました。たくさんの人に来て頂き、実りのある集いとなりました。趙博さんは去年私が入院中、「闘病のお供は喜んで」と励ましてくれた方です。鶴見俊輔さんや大倭と縁のある方々との共通の知人がいたことも、嬉しいことでした。去年の春から一年近くの治療を終え、まるで生き直すかのような日々をすごしています。「地下水のように」の言葉が、今、よりよく生きたいと願う私の心に、大切な言葉として、以前よりも理解を深めて在るのを感じています。

風ぐるま 「田舎」の自発的継承ということ

大分県耶馬溪町 鈴木健久

私達家族が、関西からここ大分の耶馬溪にやって来て15年になります。6月上旬に15回目の田植えを終えました。

私が山間部の田舎に住みたいと思ったのは、「自然の中でゆったりと心豊かにくらしたい。そして自分の食べる物は、なるべく自給する農的な暮らしがしたい。お金や効率よりも『いのち』を大切にしたい」という思いからでした。



はじめのうち
は、自分の暮らしのことで精一杯でしたが、小部落や大部落の人達のいろんな手助けのおかげで、田舎の暮らしにとけこむことができました。そうすると人間関係は、部落から私達の住

む樋山路谷（明治の合併までの村）へ、小学校区である下郷地区（昭和の合併までの村）へ、さらに耶馬溪町へと急速に拡がっていきました。田舎の人間関係は濃密で、ほとんどお互いが顔見知りです。そこには都会では考えられない様な相互扶助の精神が脈々と息づいていると思います。この地域社会の存在が、かつて日本が世界一安全な国だった根拠であり、美しい山河と、それに調和した田園風景を維持し、高い生産性とおいしい豊かな

な水や空気を保証し、高い出生率を誇り、知性豊かで従順な働き者を多数輩出していた基盤だったのだとつくづく思います。

今、田舎は過疎と高齢化で青息吐息。そしてとてもを刺すかの様に、半ば強制的に全国で進められている市町村合併。耶馬溪町も、中津市など一市三町一村の合併が、ほとんど議論されないまま進行中です。

合併によって自分達の暮らしや地域社会はどんな影響を受けるのか勉強してみようという呼びかけを行い、一昨年、「合併問題を考える会」が発足。呼びかけに応じてくれたのが、根っからの地の人より、移住者やUターンの人達が多かったのが特徴的。合併によって自治権を失い、都市の周辺部として切り捨てられ、過疎化 高齢化に拍車がかかり、地域社会そのものが根こそぎ崩壊してしまうのではないかとということが解つてきました。「考える会」は、町や議会と対決姿勢を強める住民運動へと変化していきました。

人口4千5百人足らずの静かな田舎町に起こった住民運動は、様々な反響を呼びました。シンポジウムでは中央公民館が満杯となり、各地区40ヶ所近くでミニ集会を行い、2千5百名以上の署名を集めて「住民投票条令」の請願を行い、運動は拡がりました。しかし、議会にあつさり否決されて運動は停滞。

この間、私は、心豊かに暮らしたいと思つて田舎に来たのに、反対運動に深くかわつてしまつて本当にいいのだろうか？と、ずっと心のどこかにひっかかっていました。できることなら、争い

ごとや政治的なことには、あまりかわりなく穏やかに暮らしたいのに……。一方で、様々な人とかかわり、運動が拡がっていくことに楽しさや喜びも感じていました。

この停滞を期に、反対運動とは別に、自分達はどんな地域社会づくりをめざすのか、将来ヴィジョンを行政に頼らず住民自身でつくってみようということから、「町づくり連続講座」を昨年スタートさせました。暮らしにかかわる福祉、教育、林業、環境、農業、観光、地域医療、伝統文化、等、毎回テーマを選び、様々な切り口からそれぞれの分野で活躍している町民を講師に招いて話をしてもらいました。それを聞いて参加者が町づくりのアイデアを出し合い、アイデアマップを作るという形式をとっています。すでに10回を重ね、毎回大変おもしろい話が聞け、ユニークな知恵が生まれることに驚いています。

豊かさとは、自分が豊かだと思つる暮らしを、自ら作り出せることだそうですが、田舎の価値を、そこに住む人自身が再発見、再評価することから始まるのだと思います。

今年4月の町長選挙は、合併問題が最大の争点となり、合併に慎重な町長が誕生しました。今後住民アンケートを実施し結果次第で、合併せず単独でという方向に大きくかじを切るかもしれません。

一人一人が人として尊重され、人間らしく生きる社会は、互いの顔が見える小さな自治体でこそ可能なのだと思います。「互いが責任を持ち、安心して暮らせ、豊かの上で死ぬ町」、そんな地域社会になつたらいいと思います。でも、こんな社会、かつての日本にはどこにも存在していたはず。私は、先人達の知恵がいつぱい詰まっている田舎の村のシステムを、今こそ積極的に再評価し、自発的に継承していくことが大切だと思つて

います。

合併問題を通して、私はいろいろなことを学んだ気がします。憲法の地方自治体の本旨とは何か？ 住民自治や団体自治、外国の地方自治のあり様、そして地域社会はそこに住む人達が愛情と誇りと責任を持って守らなければ誰も守ってくれないこと。

自治権を失い、地域が崩壊するかもしれないという危機感を持って初めて、憲法12条の「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」という条文が、理解できた様に思います。

*

新聞はいつも楽しく読ませていただいています。ではまた。(F I W C 関西委員会元委員長 元長 曾根寮職員 元邑人)

「だまことだま」

04・6・3

広島県賀茂郡 岡本 響子(旧姓青山)

このたび引越しをしました、『おおやまと』を新しい住所に送っていただけだと思えます。看護学校に移って4年目、今年初めて私が1年生2年生で受け持った学生が卒業し、看護師として働き始めました。私自身看護師としての経験も浅く未熟なので、教員といっても学生と一緒にできるだけケアに入るようにして臨床経験を積んでいる状態です。そんなこんなで偉そうにはできないのですが、卒業した学生は自慢したいくらいにすばらしく育ってくれた気がします。これからは紫陽花の花のように一人一人を大切にしながら、全体としてもきれいな花が咲くような、そしてやさしい看護師になってくれる人を育てていきたいと思っています。

また昨年、義父を看取りました。私が勤めてい

弥栄おどろご案内

日時 平成十六年八月二十八日(土曜日)

午後七時半より

場所 大倭紫陽花邑 西斎庭にて

今年も子供達の夏休みの思い出づくりに遊びにおいで下さい。

第281回大倭会文化行事

秋の一泊旅行のご案内

～鎌倉に栄枯盛衰の跡を訪ねる～

日時 平成16年10月31日(日)～11月1日(月)

行き先 鎌倉・江ノ島方面

[鶴ヶ岡八幡宮 鎌倉宮 日蓮上人辻説法故地など]

お泊り 江ノ島 岩本楼

定員 50名程度

費用 約45,000円

※往復は新幹線を使用します。

鎌倉ではジャンボタクシーで回る予定です。

*10月10日祝会で勉強会をします。

世話人 湯浅芳郎(電話0742-48-3389)

東光大祭と祖霊祭のご案内

日時 平成十六年八月三十日(月曜日)

午後一時二十分より

東方の碑 拜礼所にて

午後二時より

大倭大本宮拜殿にて東光大祭

奥津斎庭にて祖霊祭が行われます

この日は、昭和二十一年旧七月十五日満月の出てくる頃、東方の瑞祥が現われ、法主様に天の声「黎明は訪れたり東方の光、大法は立てり大倭太加天腹」が聞え、今日の大倭紫陽花邑が宗教活動の本宮であることを示されたのを記念する祭です。

当日夕方六時頃には東方の碑前にて、満月の出を待ちながら東方の瑞祥を考えてみたい。また有志が直会なまごひを用意してくれます。会費二千元。どなたもご参加下さい。

薬でコントロールしていく話が出ており、また直前まで、在宅医療を考えて、病院との連携が深い訪問看護ステーション探しや貸し出し電動ベッドの話で盛り上がりつつあります。希望が持てるいい精神状態だったと思います。翌日に大きな再梗塞が起きてしまったのです。家族のこと、医療のこと、ターミナルケアのこと、未だに色々なことを教わっている気がします。

大倭の風景も随分変わっているのでしょうかね。お参りにいこうと思いつながらそれも果たせておりませんが。(F I W Cメンバー 元長曾根寮職員)

寸 莎

第60回

藤 本 宏 秋 さん



心の道を求めて

スッキリと短く刈り上げた髪、ここにこととした笑顔。大倭の祭典や禊会に参加されている方ならご存知の方も多いだろう。藤本宏秋さんが今回の登場人物である。

宏秋さんは、一九六九（昭和四十四）年十月十日、京都府舞鶴市で、三人兄弟の次男として生まれた。

父恒久さんは家具などを造る職人で、いわゆる指物師（さしものし）であった。無口だが敷居や畳の縁を踏むとよく叱られた。口癖は、「なるようになる」で、とても自然体な人だったという。

母千恵子さんはとてもやさしい人。編物の先生になるための教室通いに、二、三歳の頃の宏秋さんも一緒に行ったのを覚えている。

家は割と広くて庭もあったので、小学生の頃は、兄さん達と木登りや野球、それにビー玉遊びをした。近

くには伊佐津川が流れていた。

お風呂は五右衛門風呂で、父親の削った大鋸屑で風呂焚きをするのを宏秋さんも手伝った。

中学高校時代には、宏秋さん家族にとつて様々な出来事が起った。兄さんや母親を始め、父親までもが病院への入退院を繰り返す事となる。

この頃の関心事は、人間の精神についてであった。「たとえ人は同じ環境や状況の中においても、みんな考え方や受けとめ方は違う、これは一体何なのか」という問いが生まれた。

そんな状態ではあったが、一方中学では卓球部に入り、帰宅してからも卓球クラブに通うという卓球三昧の日々。家には父親お手製の卓球台もあった。高校ではサッカー部で、毎日十キ口は走ったという。

朝は新聞配達をし、自分で弁当を作っては学校へもっていった。

この頃になると、家族に起つてい

る出来事も、「これは自分の運命だと割り切つて、受け入れる事ができるようになつてきていた。家に帰りがたくなかつた事もあったが、この家が自分の場所だと思つた」という。

高校時代に読んだ本は、村上春樹やリチャード・バック。特にRバックの『イリユージョン』はよかつた。

十八歳で就職してから今に至るまで、大阪や舞鶴の様々な飲食店で働く事になる。現在は舞鶴にある居酒屋の店長だ。

飲食関係の仕事に憧れをもつたのは、小学生の頃、母の弟の鈴木敏道さん（今年帰幽された）がウィーンのレストランで修業して、「かつこいな」と思つたのが影響しているという。帰国してはお土産を持つて遊びに来てくれるのが嬉しかつた。

まず勤めたのは、大阪の八尾にあるレストランだった。その後転々と職場を変えるが、それは、タイミングよく人が現れては、うちに来ないかと誘つてくれたり、気になる店だなと思つてると、そこで働くような流れになつたのだという。

大阪のミナミで働いていた頃は近くに知人もおらず、夜は毎日のように一人街に出た。そのうちストリートミュージシャンや、そこに集う若者達と友達になつていった。

宏秋さん二十歳になりたての十月

十四日、父恒久さんが帰幽される。二十二歳で舞鶴に帰ることに決めた。

二十四、五歳の頃は、自分探しや農業に関心が向いていた。そんな折気に入つていたログハウスのお店で松村寛生君と出会う。寛生君を通じて野草社の石垣雅設さんに会い、矢追日聖さんの存在を知る事となる。

一九九四年十二月四日、丁度大倭五十年の金鷄祭の日、初めて大倭神宮を訪ねる。遅れて三時頃に着き、社務所の戸を開けると、真正面で法主様は目をつむつておられ、「倭傳承 長曾根日子命」の朗読を皆で聞いているところだった。その後、五年の一月十五日まで五回も続けざまに大倭を訪ねた。宏秋さんは心の師を探していた。法主様と出合い、この人だと思つたのだという。

九四、九五年は、「出合いの不思議、面白さを感じた年だった」という。映画『ガイアシンフォニー』の自主上映会を催した事もあり、多くの人達と出会う機会に恵まれた。

そして、最高のむすびが訪れる。二〇〇一年、奥さんの早苗さんとの結婚だ。今では二人の間に、長女天音ちゃん、長男翔太君が誕生。「いつか自分の店をもちたい」という。「これからも禊させて頂きます、という感じ」といつて、またにこにこと微笑んだ。（聞き手＝李章根）

あじさい日記

6月12日 大倭会主催の秋の文化講演会講師依頼のため、岸田哲 溝口ツヤ子 杉本順一さんが吉野郡川上村の「森と水の源流館」へ、そのの職員で日本古代史がご専門という成瀬匡章さん（研究テーマ・吉野地域の歴史と文化）を訪ねました。

夜、交流の家でFIWCの定例委員会がありました。

6月13日 禊会。父の日が近いので参加者全員が「我が父」を語りました。

夕方5時半からは教務本庁において、法主様が施設の職員さん達に「お盆について」話されたテープを聞くということで3回目の勉強会をしました。

6月15日 大倭神宮月次祭。

6月16～17日 東方碑周辺を花



一杯にとお世話下さっている有志の方々が、紫陽花の見頃を迎え、お茶とお菓子でもてなして

「第1回あじさいまつり」を実行したところ、施設の皆さんをはじめ参加者120名を数えたそうです。

6月20日 第280回大倭会文化行事は、晴れて暑い日となりましたが参加者30（うち子供2）人でした。羽柴秀吉と明智光秀の合戦で名高い天王山中腹に、美術館として保存されている英国風大山崎山荘でゆつくりと遊びお弁当。



その後、大山崎町歴史資料館で、木津川 宇治川 桂川が合流して淀川となる地点にあって古代以来栄えたこの土地について勉強しました。

6月17～22日 邑の反保隆臣さんは北海道 東北方面へ。



20日に雨の中、青森県相馬村紙漉沢の上皇宮（長慶天皇陵墓）を訪ね、21日にも再訪、月次祭の祭典の録音テープ持参でそれに合わせ聖歌のハーモニカ演奏をして、高橋延之 末子夫妻や石田勝利 晶子夫妻と共にお参りをしてくれました。

6月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は、太平洋戦争における沖繩戦終結の日。沖繩戦で帰幽された幾十万の御霊を慰霊しました。

21日から家出中だった中島充世家庭の愛犬コロが警察に保護されていて戻りました。富雄方面のコンビニの店長さんが届けてくれたとのこと。

6月30日 大倭病院では入院中の患者さん達が七夕の飾りつくりを楽しみました。

7月4日 今夏最高の暑さ、台風接近中という天候下、参加者10数人で北川俊秋さんから要領を指導して頂き、約3時間田んぼの草取りをしました。これを例年少数人数だけでやってくれたいたとは！ 終了後、田んぼの畦の木陰でお握りやビールも出しました。

7月6日 大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

7月7日 昇ちゃんこと中村昇次さんの72歳の誕生日。毎日アピールして気を揉んでいたが無事にあちこちからプレゼントも頂き、青山美子都ちゃんと元子

かあさん、岸野春子さんと回転ずしも楽しみました。（9日、埼玉県入間市のお姉さんからもジュースセットが届きました）

7月10日 辰巳玲子（神戸市）上野幸夫（堺市） 鹿田裕昭（大阪市）さんが来邑され、『おおやまと』編集部杉本順一 齋藤正宏 李章根等と歓談しました。

大倭安宿苑では

7月6日 夜間、長曾根寮厨房

あんない

* 月次祭（大倭神宮）
8月6日（金）大倭神宮にて、午後2時より。

* 大倭会主催第四二九回禊会
8月8日（日）午前9時より大倭大本宮境内の清掃神事として行います。

なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

* 大倭教立教開宣祭及び
大倭神宮月次祭

8月15日（日） 大倭神宮にて午後2時より。

* 月次祭（大本宮）
8月23日（月） 午後2時より 大本宮拝殿にて。

* 弥栄おどり
8月28日（土） 午後7時30分より。6頁をご覧ください。

* 東光大祭及び祖霊祭
8月30日（月） 旧暦7月15日です。詳しくは6頁参照。

出火想定で避難訓練を実施しました。

（菅原園）
7月5日 七夕の集いで事前に作製した住苑者 職員参加の彥星と織姫の寸劇ビデオを上映。なかなかの力作で笑えました。（須加宮寮）

6月17日 お楽しみ外出で18名の住苑者が「なにわの海の時空館」へ行きました。

7月9日 参議院選挙の不在者投票。厳粛な雰囲気の中、それぞれの思いを込めた投票をされました。

（八重垣園）
6月23日 俳句の会。「緑陰の水面に緋鯉見えかくれ」「梅酒漬け笑い一緒に漬け込みて」「夜半目覚め句作にしばし梅雨の入り」

お願いとよびかけ

法主様ご帰臨満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様奥津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長 中西 正和

1. 奈良信用金庫 学園前支店 普通0302639
口座名 大本宮特別整備基金
中西正和
2. 郵便振替口座 00900-6-241836
口座名 大倭奉賛会